

パーソン・センタード・アプローチとスーパービジョン

押江 隆 山口大学教育学部

Person-centered approach to supervision

OSHIE, Takashi

Faculty of Education, Yamaguchi University

(Received January 10, 2016)

要約

本研究はパーソン・センタード・アプローチによるスーパービジョン（パーソン・センタード・スーパービジョン、以下“PCS”と表記）のあり方について検討し、その課題を示すものである。まずRogersのスーパービジョンに関する研究をレビューした。次に、我が国におけるPCSの研究としてセラピスト・フォーカシング（吉良, 2010）とPCAGIP法（村山, 2012）を取り上げ、加えて筆者自身のスーパービジョンの実践をPCSの実践例として取り上げた。その上でPCSが「私の臨床（白井・北田・樋渡, 2013）」を育むものであること、PCSの効果研究やプロセス研究が今後必要であることを論じた。

キーワード：パーソン・センタード・アプローチ、パーソン・センタード・スーパービジョン、パーソン・センタード・セラピー

I 問題と目的

筆者はこれまでの様々な地域臨床活動（押江, 2012a）の経験から、地域の非専門家が、グループ等への参加を通して、心理臨床の専門家である筆者からみても効果的な援助を行うようになることがしばしばあることを学んでいる。

たとえば、ある産業カウンセリング（押江, 2012b）や学生相談のグループでは、「もともと話をしたり聴いたりするのは苦手」などと言っていた心理臨床とは無関係のメンバーたちが、回を重ねるにつれて、悩みを抱えたメンバーに「あなたの置かれている状況についてもっと話して下さい」などの質問を的確なタイミングでするようになっていく。臨床心理士の悩みの相談に、彼らが乗ることすらあった（押江, 2012a）。

地域のボランティアスタッフとの協働による

コミュニティプレイセラピー（押江・足立・三浦・水戸部, 2015）では、セッション終了後のスタッフミーティングで子どもとの関わりについて相談したスタッフに対して、その場の他スタッフ全員が丁寧に耳を傾け、筆者が思いつかないような、適切で効果的なアドバイスをしている（押江・足立, 2013a）。長年参加している子どもが年下の子どもの暴力的なふるまいについて適切な“見立て”を行うことすらあった（押江・足立, 2013b）。

このように、非専門家が、傾聴できるようになったり、グループのファシリテーションをできるようになったり、適切なアドバイスをできるようになったり、“見立て”を立てられるようになったりといった姿を、筆者は地域で数多く目にしている。筆者は彼らに、メンバーや子どもとの関わり方についてのアドバイスを

ほとんどしていない。もちろんアドバイスをすることがまったくないとはいえないが、どの活動においても筆者がしていることの大半は彼らの声に耳を傾けることと、彼らが自分自身の声に耳を傾けられるように援助することである。産業カウンセリンググループでも学生相談グループでも筆者はファシリテーターとして話を聴くし、コミュニティプレイセラピーでスタッフに子どもとの関わり方について尋ねられたら「まずあなた自身はどうありたいのか」を丁寧に確認するようにしている。このことは Rogers (1970 / 2001) がエンカウンター・グループについて「訓練を受けない普通の人のなかに、もしその可能性を自由に用いることさえできるならば、援助者としての信じられぬほどの潜在力が秘められている」と述べていることを連想させる。

このような経験を地域で積み重ねながら、筆者は本学に講師として赴任し、本研究科にて大学院生のスーパービジョンを担当するようになって、セラピストをいかに養成するかが筆者の問題意識の1つとなった。この問題意識は、押江・井土ら (2013) や押江・加藤ら (2014) のエンカウンター・グループのファシリテーター養成に関する研究に、また押江・梅野 (2015) の箱庭療法のセラピスト養成に関する研究などに結実している。これらの研究や経験を通して、筆者にとってのスーパービジョンは、地域臨床でのグループメンバーやボランティアスタッフ、子どもたちとの関わり方と、基本的なアプローチは大差ないことに気づくようになった。それが、パーソン・センタード・アプローチ (Person-Centered Approach, 以下“PCA”と表記) である。

PCA は「個人は自分自身のなかに、自分を理解し、自己概念や態度を変え、自己主導的な行動をひき起こすための巨大な資源をもっており、そしてある心理的に促進的な態度についての規定可能な風土が提供されさえすれば、これ

らの資源は働き始める (Rogers, 1986 / 2001)」と仮定し、様々な分野に適用されている。PCA はセラピー (Person-Centered Therapy, 以下“PCT”と表記) はもちろんのこと、グループやコミュニティ形成、教育、紛争問題にまで挑戦している。では、PCA をセラピストのスーパービジョンに適用するとしたら、それはどのような実践になるだろうか。

Tudor & Merry (2002 / 2008) はパーソン・センタード・スーパービジョン (Person-Centered Supervision, 以下“PCS”と表記) に関する研究をレビューしているが、欧米の研究に言及するとどまり、我が国の研究を含めていない。我が国でも PCA に影響を受けたスーパービジョンの方法に関する研究はなされている。中田 (2014) は我が国の PCT の課題の1つに「訓練方法がある程度体系化すること」を挙げている。我が国も含め、PCA によるスーパービジョンに関する研究や実践を概観し、それがどのようなものであるかについて検討することは、PCT の訓練方法を体系化する上でも価値あることと思われる。

以上の問題意識より、本研究では先行研究と筆者自身のスーパービジョンの実践から、PCS のあり方について検討し、その課題を示したい。

II パーソン・センタード・スーパービジョンの先行研究

1. Rogers のスーパービジョン

Bowen (1986) は PCA の中核条件 (Rogers, 1986 / 2001) がとるかたちはスーパーバイジーのパーソナリティ等によって異なるとし、Rogers と同じ応答をできるようになることが PCS の目標ではないと述べている。Bowen (1986) によれば、Rogers は自らのスーパービジョンにおいて、スーパーバイジーがそのクライアントとの関係の文脈においてわきあがってくる態度や信念、感情を明確にし、探求するのを手助けすることに主な焦点を当てて

いた。Hackney & Goodyear (1984) による、Rogers のスーパービジョンの逐語録を読んでも、実際にそのようなやり方をしており、どのような応答が正解で、どのような応答が不正解かを伝えるような方法はとっていない。

Bowen (1984) は、非指示的で、共感を表現する主要な方法として感情のリフレクションを使用し、クライアントが話したこと以外は一切持ち出さないというような 1940 ~ 50 年代の Rogers のやり方にあわせるよう求めるスーパービジョンを「形式指向スーパービジョン (form-oriented supervision)」と呼び、個人の自己指示や自己決定といった能力を信頼する PCA の原則が失われていると批判している。

Bowen (1984) の考えでは、中核条件がとる form はセラピストやクライアントのパーソナリティや、二者のあいだで発展するやりとりの種類に応じて変わってくる。パーソナリティの違いを考慮に入れ、スーパーバイザーの内的な評価の所在 (internal locus of evaluation) の発展を重視したスーパービジョンを「生の哲学指向スーパービジョン (philosophy-of-life-oriented supervision)」と呼んでいる。Rogers のスーパービジョンは「形式指向」ではなく「生の哲学指向」であるといえる。

2. セラピスト・フォーカシング

我が国ではセラピストの支援、またはスーパービジョンの方法として、フォーカシングが活用されてきている。村山 (1984) は初心プレイセラピストの養成にフォーカシングを活用し、「共感能力を高めるうえで有効」と述べている。

その後、吉良 (2010) はセラピストの自己理解の促進と体験的距離の醸成を目的に「セラピスト・フォーカシング」を開発している。これは、フォーカシングの技法を用いて、セラピストが自分の担当している事例の面接過程で自らに生じている感情体験について、ゆっくりと時間をとって丁寧に感じ取り、吟味し、味わう

方法であり、「全体を確かめる」、「方向を定める」、「フェルトセンスの吟味」の 3 ステップからなる。

吉良 (2010) はセラピスト・フォーカシングについて「スーパービジョンの代用になるものと考えるべきではない」と述べている。一方で、小林・伊藤 (2010) はスーパービジョンにおいてセラピスト・フォーカシングを用いることの有効性を主張し、「スーパーバイザーのフェルト・センスを基点として、面接におけるクライアントの様子や話しぶり、クライアントについてのエピソードや事実的情報、セラピストが面接において感じている感じ、などの多様な素材を、スーパービジョンにおける検討のために利用することを可能にする」、「得られた理解をセラピストのフェルト・センスと照合することにより、セラピストの実感により即したものにすることを可能にする」、「スーパーバイザーが、自身のフェルト・センスに信頼をおくことを支持することにつながり、セラピストとしての主体性を発展させるためにも有効である」と述べている。

また、箱庭療法のスーパービジョンとして、セラピスト・フォーカシングを応用し、クライアントが作製した箱庭作品をスーパーバイザーが丁寧に吟味する技法として「体験過程流箱庭療法セラピストバージョン (Experiential Sandplay Therapy, 以下“EST-Th”と表記)」が開発されている (押江・梅野, 2015)。

3. PCAGIP 法

PCAGIP 法 (村山, 2012) は PCA グループ (村山, 2006) とインシデントプロセスを組み合わせた事例検討法であり、「事例提供者の提出した簡単な事例資料をもとに、ファシリテーターと参加者が協力して参加者の力を最大限に引き出し、その経験と知恵から事例提供者に役立つ新しい取り組みの方向や具体的ヒントを見いだしていくプロセスを学ぶグループ体験である」と定義されている。「事例提供者を批判し

ない」,「メモをとらない」ことがグランドルールとして設定されており, 安全感のある雰囲気の中でメンバーの質問に答えるなかで, 多様な視点が生まれ, 事例をめぐる援助ネットワーク図が生まれてくるとされている(村山, 2012)。

PCAGIP法は大変ユニークで効果的な事例検討法であるが, その最大の特長は「結論は出なくてよく, ヒントが出れば十分(村山, 2012)」とされている点であろう。村山(2012)は「もともと事例検討に結論などない」とした上で, PCAGIP法は「事例提供者の引き出しを増やすことがねらい」であり「そうすることで事例提供者が元気になる」と述べている。また中田(2012)は「PCAGIP法による対人援助者への支援は, 対人援助者へ技術や対処法を伝授するという直接的な支援ではなく, 対人援助者を支え, 成長を促すものである。対人援助者は自分なりに納得できる考え方なら, 力を発揮しやすい」, 「対人援助に関する新たな気づきが起こること, あるいは気づきに近づこうとすることがPCAGIP法の中核の体験である」と述べている。

一方で村山ら(2009)はPCAGIP法について「従来の臨床カンファレンスに替わるものではない」, 「いわゆる長期の心理治療過程を取り上げていない」とも述べている。

Ⅲ 筆者のスーパービジョン

以上の先行研究や, 先に述べたような筆者自身の地域臨床の経験をふまえ, 筆者は本学大学院にて概ね次に示すようなスーパービジョンを実施している。PCSの一例として以下に示す。

1. 傾聴を中心としたスーパービジョン

PCTではクライアントの実現傾向を信頼する。クライアントこそが自らの問題を最もよく知っており, クライアントこそがそれを変えることができる。選択して, 変化させる責任はクライアントの責任である。セラピストの役割は, 中核条件の風土を提供することで, クライアントの実現傾向が働くのを援助するこ

とである。

この図式をスーパービジョンに適用すると次のようになる。PCSではスーパーバイジーの実現傾向を信頼する。スーパーバイジーこそが自らのセラピーセッションの問題を最もよく知っており, それを変えることができると考える。選択して, 変化させる責任はスーパーバイジーの責任である。スーパーバイザーの役割は, 中核条件の風土を提供することで, スーパーバイジーの実現傾向が働くのを援助することである。筆者はスーパービジョンをこのように捉えている。

具体的には, ケースに関する語りを傾聴し, クライアントとの接し方やケース等について「自分なりに納得できる考え方(中田, 2012)」がスーパーバイジーに生まれるよう援助する。

ケースの語り方は, スーパーバイジーのニーズに合わせる。報告書を作成し, それに沿ってケースを報告するスーパーバイジーもいれば, 報告書等を用意せずにケースについて語るスーパーバイジーもいる。「スーパービジョンを受けるにあたってどのような準備をすればよいか」と尋ねられたら, 「あなたにとって一番勉強になるかたちで準備してください」と応えるようにしている。それでも「よくわからない」ということであれば, 過去のスーパービジョンの実施例を挙げ, 2人で話し合いながら方法を決める。

語りの中で, スーパーバイジー自身は触れていないが, 筆者に気づいた点があればそのことを伝える。特に, クライアントの発言の背後にはどのような感じ(feeling)があるのか, またスーパーバイジーの応答がクライアントにどのように映ったのかについて, より豊かな捉え方ができるように様々な角度から伝えようと努力する。ただし「僕にはこんなふうに見える(感じる)けど, ○○さんはどう思う?」と尋ねる等して, 押しつけにならないように留意する。

このようなやりとりを通して, ケースやクラ

クライアントの捉え方が次第に豊かになり、次のセッションをどのように進めていけばよいかという話になってくる。進め方についても、スーパーバイザー自身の考えを聴く。筆者が方法を提案するとき、「僕はこういう理由で、こんなふうになればいいと考えている。そうするとこんなふうになると思うよ。だけど、これはあくまで僕のやり方だからなあ。〇〇さん自身はどうしたいかな？」等と尋ね、スーパーバイザーの声を丁寧に聴き、可能な限りスーパーバイザー自身に方針を決めてもらうようにしている。筆者の背後にあるのは「スーパーバイザーこそが自分のケースの進め方を最もよく知っている」という確信である。

この方法は、ある意味で厳しさを伴う。セラピーセッションの責任をなるべくスーパーバイザー自身に置こうとするので、成功感だけでなく失敗感もすべてスーパーバイザー自身に返ってくる。成功感であれ失敗感であれ、どんな感じ方であれ、それを豊かに味わい受容することができるよう援助し、支えていく。スーパーバイザー自身が自分で感じ取り、考え、自分の手で実行するからこそ、もっともよい学習になると考えるためである。

筆者のスーパービジョンの中核は応答や技法の指導ではない。応答や技法を提案しないわけではないが、その提案を採用するか否かはスーパーバイザー自身の生の哲学 (Bowen, 1984) に委ねられる。スーパーバイザー自身の感覚にフィットしない助言ほど有害なものはないと筆者は考えている。

2. セラピスト・フォーカシングの併用

セラピスト・フォーカシングはセラピスト自身のケースやクライアントに対する感じ方を深めるのに大変有効であると考えている。特にスーパービジョンの中で、スーパーバイザーが「クライアントと接していて、なんだかよくわからないけどこんな気持ちになってしまった」などと述べたとき、その感じを丁寧に吟味する

方法としてセラピスト・フォーカシングを提案することがある。これまで「なぜ自分がそのように感じたのかがわかった、腑に落ちた」といったフィードバックを受けている。神田橋(2015)は「フォーカシングは逆転移の感知に有用」と述べている。

また、筆者はプレイセラピーやアートセラピーのような、非言語中心のセラピーのスーパービジョンで特に、セラピスト・フォーカシングが有用であると考えている。先に述べた箱庭療法のバリエーションの1つである EST-Th では箱庭作品のいわゆるユング流の解釈を行わず、セラピスト・フォーカシングを用いてスーパーバイザーの体験過程を手がかりに、箱庭から感じられる意味を言い表すことを重視する。スーパーバイザーからは「ケースに対する自分の思いを整理できた」、「スーパーバイザーに教えてもらうのではなく自分自身で『こことここがつながっている』と気づけた」といったフィードバックがあった (押江・梅野, 2015)。EST-Th ではスーパーバイザー自身のクライアントやケースに対する感じを吟味することで、ケースの中で自分自身どのようにすればよかったのか、また今後どのようにすればよいかについての見通しが立ってくる。

3. グループ・スーパービジョンの活用

筆者のスーパービジョンでは、ケースやクライアント、スーパーバイザー自身の感じについて、より豊かな捉え方ができるようになることを願っている。その点で、グループ・スーパービジョンは大変有効である。複数のメンバーが各々の視点から語ることで、多様な視点を得られる。このように考えているので、筆者のスーパービジョンは可能な限りグループで実施するようにしている。PCAGIP法は12～13人で実施する事例検討会のための方法であるから、臨床指導生が2～3名の筆者の研究室でスーパービジョンに採用することはできないが、スーパーバイザーに対して批判が起こりそうになっ

たら介入するなど、PCAGIP法と同様に安心感を第一に優先するようにしている。

IV 考察

1. パーソン・センタード・スーパービジョンは「私の臨床」を育む

Bowen (1984) によれば、PCS によってスーパーバイザーは自らが成果の評価者であることを学び、自らの行動を導く内的な評価の所在を發展させていくという。また小林・伊藤 (2010) はセラピスト・フォーカシングについて「スーパーバイザーが、自身のフェルト・センスに信頼をおくことを支持することにつながり、セラピストとしての主体性を發展させるためにも有効である」と述べている。このように、PCS ではスーパーバイザー自身の体験が中心に置かれている。

Lambers (2000) は PCS を一致の發展を支持するものとして位置づけている。一致とは、セラピストが職業上の建前や個人的な仮面をまとわず、その関係の中で自分自身であること、セラピストが自身の内面でその瞬間瞬間に流れつつある感情や態度に十分にひらかれており、ありのままであることであり、セラピストの中で意識されていることと、クライアントに向けて表現されていることとが密接に符合していることを指す (Rogers, 1986)。PCS ではスーパーバイザー自身の態度や信念、感情を明確にし、探求するのを手助けする (Bowen, 1986) ことで、クライアントやケースとの向き合い方が見えてくる。その向き合い方は、個々のスーパーバイザーによって異なるし、スーパーバイザーとスーパーバイザーの間でも異なる。なぜなら PCA の中核条件がとるかたちはセラピストのパーソナリティ等によって異なる (Bowen, 1986) からである。このように考えると、クライアントやケースとの唯一無二の「正しい向き合い方」は存在しない。PCS を通して一致が發展することで、すなわち職業上の建前や個

人的な仮面をまとわず、その関係の中で自分自身でいられるよう援助することで、そのスーパーバイザーならではの個性や持ち味が活かされたセラピーが実現していく。

したがって、PCS ではスーパーバイザーの一致が發展し、自分自身で納得できる考え方が生まれれば、それが結論であると考えられる。場合によっては結論すら出ない。むしろ結論は出なくてよく、スーパーバイザーの引き出しを増やすことができればそれで十分 (村山, 2012) と考える。PCS は“その道の権威”が考えた唯一無二の「正しい解釈」や「正しい応答」、「正しい結論」をスーパーバイザーに教える場ではない。スーパーバイザー自身の体験こそが最高の権威である (Rogers, 1961)。

白井・北田・樋渡 (2013) はセラピストの個別多様性を認めることを強調して、理論や技法にセラピストがあわせる「正しい臨床」に対して、セラピストに合った形で理論や技法を取り入れて、そのセラピストなりの「私の臨床」を作り上げていくことが重要と述べている。この分類に従うなら、技法指導ではなくスーパーバイザー自身の体験を中心にすえたスーパービジョンである PCS は「私の臨床」を育むものといえよう。

Rogers はドグマ化を拒絶し、模倣を嫌い、徹底して技法を残さなかった。著書や論文は「著者は～」ではなく「私は～のように考える」と書くことにこだわった。また「君はそれをどう考える？」とその人自身の考えに耳を傾ける人だった (村山, 2015)。

Rogers の著書や論文には Rogers 自身の「私の臨床」が書かれている。我々は著書や論文を通して Rogers に「君はそれをどう考える？」と常に問われ続けているのである。Rogers を本当の意味で継承するならば、それに刺激を受けながらも、そこから自由に、我々一人一人が自分ならではの「私の臨床」を打ち立てていかなければならないのである。

2. パーソン・センタード・スーパービジョンの課題

吉良 (2010) はセラピスト・フォーカシングが「スーパービジョンの代用になるものと考えべきではない」と述べている。また村山ら (2009) は PCAGIP 法について「従来の臨床カンファレンスに替わるものではない」、「いわゆる長期の心理治療過程を取り上げていない」と述べている。吉良 (2010) や村山ら (2009) の指摘からは「スーパービジョンは PCS では不十分である」とも読み取れるし、「PCS の方法に検討の余地がある」とも考えられる。

そもそも「対人援助者へ技術や対処法を伝授するという直接的な支援ではなく、対人援助者を支え、成長を促す(中田, 2012)」PCS だけで、はたして必要十分なのだろうか。たとえばフィリアルセラピーは、親が子どもに対してプレイセラピーを実施する方法だが、子どもへのプレイセラピーは PCA に立脚(子ども中心プレイセラピー (Child-Centered Play Therapy)) する一方で、親への教え方は Skinner の学習理論をもとにしている (Guernsey, 2003/2011)。このように、フィリアルセラピーではセラピーとスーパービジョンで理論を使い分けているが、それでは、プレイセラピーのスーパービジョンは PCA によるものでは不十分なのだろうか。

PCA にはセラピーだけでなく、教育への応用に挑戦し続けてきた伝統がある (Rogers & Freiberg, 1994/2006)。しかし Tudor & Merry (2002) は、PCS に関する研究が「驚くほど少ない」と述べている。技法を指導せず、セラピストの一致の発展を支え「私の臨床」を育む PCS では、何ができて、何ができないのだろうか。PCS と、技法指導を中心としたスーパービジョンとで、教育の効果は異なるのだろうか。PCT についてはこれまで数多くの研究がなされてきたが、PCS についても効果研究やプロセス研究が今後望まれる。

引用文献

- Bowen, M. (1986) . Personality Differences and Person-Centered Supervision, *Person-Centered Review*, 1 (3) , 291-309.
- Guernsey, L. (2003) . Filial Therapy In Schaefer, C.E. (Ed.) *Foundations of Play Therapy*, Wiley. (申崎真志 (監訳) (2011) . プレイセラピー 14 の基本アプローチ——おさえておくべき理論から臨床の実践まで, 創元社, pp.90-127.)
- 神田橋條治 (2015) . コトバ・イメージ・実体験, 村瀬孝雄・村瀬嘉代子 (編) [全訂] ロジャーズ——クライアント中心療法の現在, 日本評論社, pp.23-24.
- 吉良安之 (2010) . セラピスト・フォーカシング——臨床体験を吟味し心理療法に活かす, 岩崎学術出版社 .
- Lambers, E. (2000) . Supervision in Person-Centred Therapy: Facilitating Congruence. In Mearns, D. & Thorne, B. (Eds.) , *Person-Centred Therapy Today*, London: Sage, 196-211.
- 村山正治 (1984) . プレイセラピストの訓練にフォーカシングを適用した 1 事例, 日本心理学会第 48 回大会発表論文集, 788.
- 村山正治 (2006) . エンカウンターグループにおける「非構成・構成」を統合した「PCA-グループ」の展開, 人間性心理学研究, 24, 1-10.
- 村山正治・江口尚子・衛藤萌・小埜優依・黒川明宏・立川隆一・久留玲子・前泊麻理菜・松田有加・三澤篤・山口瑞穂・奥原孝幸 (2009) . PCAGIP 法の実例 (Ⅲ) —— PCAGIP 法の実例の報告と考察, 東亜大学大学院心理臨床研究, 9, 3-13.
- 村山正治 (2012) . PCAGIP 法とは何か, 村山正治・中田行重 (編著) 新しい事例検討法 PCAGIP 入門——パーソン・センタード・アプローチの視点から, 創元社, pp.12-21.
- 村山正治 (2015) . 大学院生の指導・養成・訓練のための自己実現モデルの展開, 村山正治

- (監修) 井手智博・吉川麻衣子 (編) 心理臨床の学び方——鉦脈を探す, 体験を深める, 創元社, pp.189-204.
- 中田行重 (2012). PCAGIP法の論理, 村山正治・中田行重 (編著) 新しい事例検討法 PCAGIP 入門——パーソン・センタード・アプローチの視点から, 創元社, pp.42-48.
- 中田行重 (2014). わが国におけるパーソン・センタード・セラピーの課題, 心理臨床学研究, 32 (5), 567-576.
- 押江隆 (2012a). 相互援助コミュニティの心理臨床モデルに関する実践的研究——パーソンセンタードアプローチの新たな展開としてのコミュニティアプローチ 関西大学大学院心理学研究科博士論文
- 押江隆 (2012b). パーソンセンタード・コミュニティアプローチによる産業カウンセリングの試み, 日本人間性心理学会第 31 回大会発表論文集, 90-91.
- 押江隆 (2015). コミュニティプレイセラピー——コミュニティ・アプローチによる新しいプレイセラピー, 山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要, 6, 3-12.
- 押江隆・足立美美 (2013a). 学校に困難を抱えた子どもの居場所活動における心理臨床家の果たす役割——ボランティアとの関わりに着目して, 日本心理臨床学会第 32 回大会発表論文集, 224.
- 押江隆・足立美美 (2013b). 学校に困難を抱えた子どもの居場所活動に関する研究 (I)——心理臨床家の子どもとの関わりに着目して, 日本人間性心理学会第 32 回大会発表論文集, 120-121.
- 押江隆・井土優・宇佐川志帆・熊谷佐紀・戸谷紀子・日高美咲・樋野友希・平田麻衣・藤田理恵・松田咲子・松田典子・三浦啓子 (2013). 大学院の講義におけるエンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み, 山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要, 4, 69-82.
- 押江隆・加藤寛子・水戸部準・大濱知佳・大塚聡介・大津久美・上田佳苗・大山薫・堺屋悠紀 (2014). 大学院の講義におけるエンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み (第 2 報), 山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター紀要, 5, 17-26.
- 押江隆・梅野智美 (2015). 「体験過程流箱庭療法」開発の試み (2) ——セラピストが箱庭作品を味わう方法の検討, 日本人間性心理学会第 34 回大会発表論文集, 48-49.
- Rogers, C. (1961). *On becoming a person*. Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers, C. (1970). *Carl Rogers on encounter groups*. New York: Harper and Row. (畠瀬稔 (訳) (2001). グループのなかで促進的人間であることができるか?, H. カーシェンバウム・V.L. ヘンダーソン (編) 伊東博・村山正治 (監訳) ロジャーズ選集 (下), 誠信書房, pp.106-128.)
- Rogers, C. (1986). A client-centered / person-centered approach to therapy. In Kuash, I. & Wolf, A. (Eds.), *Psychotherapist's Casebook*. Jossey-Bass, pp.197-208. (中田行重 (訳) (2001). クライアント・センタード／パーソン・センタード・アプローチ, H. カーシェンバウム・V.L. ヘンダーソン (編) 伊東博・村山正治 (監訳) ロジャーズ選集 (下), 誠信書房, pp.162-185.)
- Rogers, C., & Freiberg, H..J. (1994). *Freedom to learn*. (3rd). Upper Saddle River, NJ: Merrill. (畠瀬稔・村田進 (訳) (2006). 学習する自由第 3 版, コスモス・ライブラリー.)
- 白井祐浩・北田朋子・樋渡孝徳 (2013). セラピスト・センタード・トレーニングの意義——「正しい臨床」から「私の臨床」へ, 志學館大学大学院心理臨床学研究科紀要, 7, 3-11.
- Tudor, K. & Merry, T. (2002). *Dictionary of Person-Centred Psychology*. Whurr. (岡野達也 (2008) (監訳) ロジャーズ辞典, 金剛出版.)